釧新郷土芸術賞に輝く

<1>

五十一年度釧新郷土芸術賞の受賞者が決まった。いずれも郷土の芸術振興のため、積極的な発表活動と後進の育成につとめ、芸の神髄の追求にたゆまぬ努力を重ねている人ばかり。展示部門では〝人間〟を描くことをライフワークとして、個性豊かな群像作品に取り組む川瀬敏夫さん。ステージ部門では郷土色あふれる歌曲の作曲、コーラスや弦楽の質の向上と広がりに努める景雲次さん。自宅二階に本道には稀な本格的な能舞台を設けて宝生流能の古典継承に精進する高橋三郎さん。以上の三氏のほか、ことしは特に新進時代を釧路で過ごしたあと、パリ在住二十年、現在はパリ画壇というよりは世界画壇に注目される業績を挙げ、ふるさと道東の美術界にも大きな刺激を与え続けている増田誠氏に特別賞が贈られることになった。十九日の受賞式を前に、それぞれの業績とプロフィルを紹介する。

受賞者の横顔

川瀬敏夫さん（絵画）

教育大釧路分校にはいって望月正男教授に師事、初めて本格的な絵画勉強にはいった。在学三年のときの作品「工場」が全道展に初入選、周囲から〝建て物の川瀬〟になれ…と励まされ、それから一年余りは、建て物の描写に打ち込んだが、ただ〝物〟を〝写す〟だけが絵なのか…という疑問から描けない時期にぶつかった。

しかし、いっぽうでは描かねばならぬという欲求も強まるばかり。そこでまず自画像から打開の道を探り、人間、群像へ…とモチーフを発展させて来た。一時は抽象も手がけたが、結局は具象に帰った。

人物群像に取り組む川瀬さん

人間群像モチーフに
納得いくまでデッサン

いろいろな人間が、いろいろな場所で、いろいろな形で生きている…人間存在とはいったい何なのか、自分と周囲の人たちとのつながりとは何なのか、以来、一貫して人間群像を追い求めている。

「風景はどうも描けない・大き過ぎ、美し過ぎる自然に負けて、ただ〝物〟を写すだけに終わりそうだから」と自分を見つめる。「人物といっても平板な表面的な行為やフォルでは私のいいたいことを描き切れない。人間世界の肉奥を画布のなかにどうとらえ、そのドラマ性をどう凝縮させるか、納得のいくまでデッサンを重ねる。もともと弱い体質の私が、勤めの合い間の制作だから、苦しいことの連続です」という。だがその作品の格太さは定評があり、画面には常に快よい緊張がみなぎっている。

「結局、私にとって〝人間〟を描くことは生涯を賭けて追い求めるライフワークになるだろう」と、受賞の決意を語っているが、路傍の魚屋を描いた最近作「人たち」（百号）は釧路市の五十年度賞い上げ作品になっている。

昭和七年、釧路市で生まれ、日進小を出て一時は十勝へ、再び釧路に戻って道教育大釧路分校を卒業のあと、現在は景雲中の美術教諭・生徒に対するのは何よりも難しいことだ」と、教師としての生き方を厳しく自省している。家庭は、幸子夫人と長女奈緒美さん（中三）長男匡君（小四）の四人暮らし・匡君は父の絵をみて「ぼくのクラスの友だちの絵よりへただ」と評している。

郷土の絵画グループ「ノワール」には十五年前の結成当初から参加、四十一年から全道展会員・人間の輪を広げるため…暇あれば読書、自称〝ザル碁〟も少々打つ。